

仮想現実とは何か

～ ヒト脳内に構築される概念体系と天命反転をめぐる ～ 荒川修作に捧ぐ

得丸公明(衛星システム・エンジニア)

〒158-0081 東京都世田谷区深沢 2-6-15 E-mail: tokumaru@pp.iij4u.or.jp

あらまし ヒトとヒト以外の動物の違いは、通信方式がデジタルかアナログかの違いにすぎない。犬も概念を持ち、それを体系化する。概念体系が脳内に構築されると、それが世界を見る認識枠組みとなり、そこにあるものが見えないという現象がおきる。これも仮想現実ではないか。人類の誤りは自然との関係を断ち切った文明を発展させたことであり、それに気づき自然と調和する文明の構築が求められている。

キーワード 仮想現実とは、ないものが見える、あるものが見えない、概念体系、天命反転、デジタル言語学、ブール代数 NOT、生命の論理

What is Virtual Reality?

- Some thoughts on the Concept System established in Human Brain
and the Reversible Destiny - In memory of ARAKAWA

Kimiaki Tokumaru (System Engineer)

2-6-15 Fukasawa, Setagaya-ku, Tokyo, 158-0081 Japan E-mail: tokumaru@pp.iij4u.or.jp

Abstract The difference between human and non-human animals is simply digital or analog communication methods. Dogs also have concepts and establish concept system. Once concept system is constructed in the mind, it works as the framework of world perception and hides some reality. Isn't it a virtual reality? The human mistake is to have developed its civilization disconnected with and antagonistic to the nature. It is time to create a new civilization harmonious with the nature.

Keyword What is VR?, seeing inexistence, blind to existence, concept system, Reversible Destiny, digital linguistics, Boolean Operation NOT, life logic

1. まえがき：デジタル言語学と概念体系

1.1. デジタル言語学概観

深刻化し後戻り不能の様相をみせる地球環境問題に憂慮した筆者は、人類と文明の起源に興味をもち、2007年4月に最古の現生人類遺跡である南アフリカのクラシーズ河口洞窟を訪問した。[1][2]

南アフリカの南部海岸線は、今から1億4500万年前にゴンドワナランドが分裂した跡であり、9kmもある厚い砂岩層が1000kmほど続く。洞窟は海拔20mのところに、かつて温暖化していて海水面が高かった時期に海食作用で穿たれてできた。3号洞窟は西に向かって開口していて、インド洋に沈む夕陽を眺めることができた。静かで美しく住み心地よさそうな洞窟の中にいると、ここで人類が言語を獲得する進化をとげたのではないかという思いがしてきた。

帰国後に三鷹天命反転住宅で洞窟生活を試し、ハダカデバネズミの生態と音声通信を調べ、情報理論を基礎から勉強したところ、ヒトとヒト以外の動物の音声通信の違いは、用いられている信号がデジタルであるかどうか、情報源・通信路・伝送路における符号化・復号化が行なわれていることにあり至った。す

なわち、離散的な周波数特性をもつ音節の数が言語共同体ごとに一定数に決まっていて、それを組み合わせて作った単語を文法規則にしたがって紡いでいくことがデジタル通信である。

脳内神経回路上は単語単位で内言処理されている。符号化過程は3つあり、どれも無自覚に行なわれている。情報源符号化には、数音節の単語をパターン認識によって記憶に結びつける概念化と、単語をつなぎ合わせる文法規則があるが、どちらも生成的に獲得される。自然の音表象を語源に受け入れることは、通信路上での符号誤りをおきにくくする通信路符号化に役だっている。

伝送路符号化過程はデジタル変調したものをアナログ復調することによって、エントロピー的な安定と処理速度の高速化がはかられる。つまり、ヒトの発声器官は、舌の位置や口の形状を繊細に制御することによって子音と母音という離散情報を声に与えて変調する一方で、聴覚器官は動物と同様にアナログな音声振幅の包絡線の情報として単語単位で聞き取っている。ペットの動物がことばを聴いて理解するとき、ヒトと同じように音声刺激と記憶のパターン認識が行われて

いる。[3]

1.2. イヌの概念体系

後述(3.2)するように、パブロフは犬の感覚や欲望の存在を認めないため、一連の条件反射実験において犬に与えた音響・視覚刺激が、一定の条件で興奮刺激(+)・抑制刺激(-)に変わると考えていた。この考えでは、同じ刺激を与え続けていて、はじめのうち出ていた「効果」(涎)が急激に(条件反射の「消去」)あるいはだんだんと出なくなる現象(「抑制」)を、大脳皮質の疲労として説明することになる。[4]

犬が記憶をもち、感覚器官から送られてくる刺激を記憶に照らして判断すると想定すると、脳が受け取った刺激を有意(A)・無意(notA)と判断することになる。効果の減少は、犬が「学習した」、犬の「食欲が減退した」から起きたと解釈できる。[5]

パブロフの興奮・抑制刺激の考えでは、どうしても説明できなかったのが、「相互誘導」現象である。これは犬に餌と結びつく刺激と餌と結びつかない刺激の2種類を教え込んでから行なわれる。「正の相互誘導」は、餌と結びつかない刺激を与えた後で、餌と結びつく刺激を与えると、涎が早く多く出る現象である。「負の相互誘導」は、餌と結びつく刺激を与えて餌を与えた後で、餌と結びつかない刺激を与えて餌を与えることを繰り返しても、餌と結びつかない刺激の後で涎が出ない現象である。

相互誘導実験は、犬の脳内でブール代数のNOTによって2つの刺激がひとつの体系として認識されていると筆者は解釈する。概念体系はヒトに固有のものではなく、生命の論理によって高次精神活動を行なう動物が一般的にもちうるものではないか。

2. ないものが見える仮想現実感覚

仮想現実とは、「コンピュータグラフィックスや音響効果を組み合わせて、人工的に現実感を作り出す技術」として定義されるが、これは仮想現実を作成し、提示する側の定義である。この定義では、画像や音響を提示されたヒトや動物が、それを「現実によく似たにせもの」として受け取るか、あるいは「現実そのもの」として受け取るかは、あまり問われない。

筆者は、仮想現実とは「現実には存在しないが、刺激を受けた者がそれを現実として受け止めて行動する刺激」と定義する。この定義では、提示された刺激が、コンピュータグラフィックスやシンセサイザによって電子的に作られることは要件ではない。その刺激が、ヒトやヒト以外の動物の脳内に記憶されている現実のパターンと一致して現実に対応するのと同じ行動を招くことと、にもかかわらず現実には存在していないため

に成果が生まれないことが要件となる。

この定義によれば、電話で息子の名を騙って老人を銀行に出向かせて、犯人の口座に振り込みをさせるオレオレ詐欺も、仮想現実である。息子のためにお金を振り込んでも、お金は息子のもとに届かない。

結果が生まれないとよい場合もある。戦闘機の操縦を誤ってもパイロットは死なないし、飛行機も壊れない。難しい操縦を失敗しても被害が生まれないところに、仮想現実の存在価値がある。実際に仮想現実とは、ドッグファイトなど戦闘機の戦技訓練のために生まれた技術であると聞いている。

ラジオドラマの効果音、たとえば行李の中に小豆を入れて揺すってつくる潮騒の音など、それを聞き手が本当に潮騒であると思ったなら仮想現実である。また、人形浄瑠璃や紙芝居など、語り手は一人であるのに、人形の動きや絵との視聴覚連合効果によってそれぞれの登場人物の声として脳内で処理され、少ない手間や費用でダイナミックな演劇効果が得られる。

筆者がこの定義に思い至った背景には、美術館の壁に架けられていた尾形光琳の絵を見て、「おおおっ、さすが光琳だ。雁が本当に夕空を飛んでいる」と感動し、いったいどのように描けばこんなにリアルに描けるのだろうかと思って、近づいてしげしげと眺めたところ、ひらがなの「へ」の字をさかさまに一筆で描いているだけであったことに驚いた経験がある。

我々の感覚器官が脳に伝える視聴覚の遠隔刺激は、脳内で長期記憶として保存されている形状や音響のパターンと照合されて、「現実」か、「よくできた偽物」かの弁別が行なわれているのではないだろうか。

光琳の絵やオレオレ詐欺の電話が仮想現実を引き起こすように、脳が現実だと判断するにあたって、ポリゴンの多さや本人の肉声との類似性は問題ではない。脳内長期記憶のパターンは、我々が思っている以上に単純化されているのかもしれない。いったいどのようなメカニズムによって脳は現実かどうかを判断しているのだろうか。これは視覚・聴覚だけの問題でもなさそう。紙芝居の例など、複数の人物が視野に入っているときに声が聞こえると、視覚と聴覚の連合作用によって脳は自動的に複数人物の会話として受け止めるようである。

3. あるものが見えない仮想現実感覚

ハムレット 何もお見えにならないのですか。

王妃 まったく何も。でも、目に映るものはすべて見えておりますわ。

(シェイクスピア「ハムレット」第3幕)

「ねエ坊ちゃん、見てはいけないという約束を破った

のが、いけなかったのではないのですよ。バスケットの中を覗いても、男には何も見えなかったということ、これがとっても怖ろしいことなんです。二人のために女が星の世界から持ってきてくれた、いろんな素敵なものが、この男の眼には見えなかったのですからね」(L・ヴァン・デル・ポスト原作 由良君美述「ブッシュマンの詩」K・I・C 思索社 1983 年)

誰しも目に映るものはすべて見ているつもりである。しかしながらそこにあるものが仮にすべて目に映っていても、脳が認識しないことがある。

存在しないものを現実であると判断することが仮想現実であるとすれば、あるものをないと判断すること、存在しているのにそれが見えない場合も仮想現実と呼べないだろうか。これはコンピュータが現実っぽい映像や音響を生み出すという定義では取り扱うことができないばかりではなく、光琳の画法も人形浄瑠璃の義太夫節と人形遣いとも別の次元の話である。認識の枠組み、見る者・聞く者の意識形成によって決定づけられることであり、認識者の主観とあるがままの現実を比較対照してはじめて現実と認識の齟齬、認識の欠如が明らかになることである。

あるものをないと判断するのは、現実存在が視界に入っているのにそれを認識できない場合である。情報処理能力が量的に不足していたり(あまりに膨大な量の情報だから)・質的に見のがす(目利きでないから)というのとは違う。「見つけられない」のでもなく、「見のがす」のでもない。目に入った現実が見えていて認識できない「見過ごす」場合である。網膜には映っているのに見えないというのは認識の根源にかかわるよほどの事態である。

3.1. 超現実主義の絵画として現実を捉えた例

はじめに紹介する事例は、原民喜の『夏の花』の一節である。[6]

原爆投下を受けた翌日の広島を歩いていた著者は、目にする光景を記録していくのだが、だんだん脳が受け付けなくなり、「超現実主義の画」のように感じて、片仮名で描きなぐるしかないと感じた。この表現行為は、現実を受け入れることができない作家の心を表しており、被爆直後の広島の悲惨な状況が認識の限界を超えていたことを伝える。

ギラギラと炎天の下に横はつている銀色の虚無のひろがりの中に、路があり、川があり、橋があつた。そして、赤むけの膨れ上つた屍体がところどころに配置されてゐた。これは精密巧緻な方法で実現された新地獄に違ひなく、ここではすべて人間的なものは抹殺

され、たとへば屍体の表情にしたところで、何か模型的な機械的なものに置換へられてゐるのであつた。苦悶の一瞬足掻いて硬直したらしい肢体は一種の妖しいリズムを含んでゐる。電線の乱れ落ちた線や、おびただしい破片で、虚無の中に痙攣的の図案が感じられる。だが、さつと転覆して焼けてしまつたらしい電車や、巨大な胴を投出して転倒してゐる馬を見ると、どうも、超現実派の画の世界ではないかと思へるのである。

この辺の印象は、どうも片仮名で描きなぐる方が応はしいやうだ。それで次に、そんな一節を挿入しておく。

ギラギラノ破片ヤ
灰白色ノ燃エガラガ
ヒロビロトシタ パノラマノヤウニ
アカクヤケタダレタ ニンゲンノ死体ノキメウナ
リズム
スベテアツタコトカ アリエタコトナノカ
パット剥ギトツテシマツタ アトノセカイ
テンプクシタ電車ノワキノ
馬ノ胴ナンカノ フクラミカタハ
ブスブストケムル電線ノニホヒ

3.2. 動物の感覚・思考・感情・欲望を認めない立場

パブロフといえば犬を使った条件反射実験を思い浮かべる。これは、「パブロフ」という表現が、「条件反射」という表現を連鎖的に想起させただけであり、パブロフがどのような人物で、何を考えてどのような実験を行ない、どのように実験結果を解釈したかという知識とは別の次元で起きている現象である。

パブロフが何を考えてどんな実験を行なったかは、彼が 1924 年に行なった講義録が日本語でも文庫化されている。[4] 上下 2 冊に 23 回の講義が記録されている本書を通じて、パブロフと同僚たちが実験を通じて考えたことを読み解くことは、筆者にとってはなかなか骨の折れる作業であつた。

まず、第 1 講ではパブロフが何を考えて実験を行なうに至った背景が簡単に書かれ、第 2 講で犬に条件刺激を与えとはどういうことか、実験の方法論が論じられ、第 3 講以降は延々と犬に刺激を与えて出てくる涎の数を数えるさまざまな実験とその結果が報告される。パブロフはそれぞれの実験結果を読み解いて、犬の大脳皮質で起きている現象を推定し、現象を命名する。似たような現象に、まったくなじみのない新しい概念が付与されるのだが、その現象がなぜ起きたのかをパブロフたちも解明できなかった事例も多く、読者としてついていくのが大変であつた。

第 17 講からは病的症例の研究であり、はじめは洪水のトラウマに苦しむ犬や犬によって気質が違ふこと

が報告されるのだが、第 19 講から第 21 講は脳の一部・全部を切除した実験の報告で、あまりに痛々しくてまともに読みすすめることができなかった。

最後の第 23 講でパブロフは「大脳半球に帰着される高次神経活動のもっとも共通の基盤は、高等動物でも人間でも同一である。したがってこの活動の基本的現象は、人間でも動物でも、また正常でも病的な例でも同じはずだといっても反論の余地はない」と結論づける。

こうして読みおわると、犬でもヒトでも大脳半球の作用は同じであるのかと一瞬納得するのだが、何度か読み直して、パブロフは、犬に記憶や思考・判断能力があると認めないことに気づいた。条件反射と呼ぶのは、条件刺激が大脳皮質細胞と起こす生理現象であり、機械的に起きることが想定されていたからだ。

パブロフの言葉によれば、一部の同僚たちは「主観的見地にたち」「実験にもちいたイヌの考え、感情、欲望などその内界を想像し、想像をもとに分析しようとした。」この「解釈に関してたがいにするどく対立し、その後いろいろこころみても、なんら一致した結論に達することができなかった。」

パブロフの立場は、「イヌの感覚、感情、欲望を自分なりに想像してみる必要があるだろうか。断固たる『いな』である」というものであった。[7]そして実験結果とその解釈を読み返すと、この立場で一貫していることがたしかめられた。

すると、第 23 講でイヌとヒトとで高次神経活動の基盤は同一であるということと矛盾しないだろうか。つまり、パブロフはイヌには感情や欲望や思考がないことを前提に「条件反射」実験を行なって、その結果、ヒトとイヌとで大脳半球のはたす役割は同じであるという結論を導いた。もしヒトとイヌとで、感覚、感情、欲望の有無という差があるとすれば、それはどう解釈されるべきだろうか。

パブロフは現実をフィードバックして認識枠組みを再構築することに至らなかったのだ。前提は間違っていたが、前提となる認識枠組みがあまりに強固にパブロフのものの見方を支配していたため、それを自覚して修正できなかった、矛盾をそのままにして死んでいったようだ。

言語学者の鈴木孝夫の名著『ことばと文化』の第 5 章「事実に意味を与える価値について」の中に「キリスト教は周知の如く動物には魂を認めない」という表現がある。パブロフの思考を制約していたのはこれだったのだろう。キリスト教に詳しい友人に聞いたところ、動物に魂を認めないというのは、聖書に「主なる神は、土(アダマ)の塵で人(アダム)を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者と

なった。」(創世記 2:7)とあることに由来するそうだ。

パブロフは生まれ育ったのが教会司祭の家庭であり、高校まで神学校に通っていた。司祭になることを拒否して大学に進んだのだが、幼い心に焼き付けられた「動物には魂はない」という信念が邪魔をして、現実を見ても受け入れることができなかったということはないだろうか。

幼心に植えつけられた観念は、それを改めることが必要な事態に出会わないかぎり、大人になっても消えることがない。DNA の二重らせん構造の発見者としてノーベル賞を受賞した F.クリックは大学在学中に、男性の肋骨は女性より一本少ないといって友人に笑われた思い出を自ら記録している。[8]

4. 概念体系が現実を否定する

4.1. 刺激を分化する能力

パブロフの行なった実験の中で「分化」と呼ばれる実験は、2 つのよく似た刺激のうち一方は餌や異物注入といった口腔内への無条件刺激を伴い、もう一方は無条件刺激を伴わないという条件づけを行なうものである。犬は刺激のわずかな違いを弁別し、無条件刺激を伴う刺激に対しては涎が出、伴わない刺激に対しては涎が出ないことを確かめた。

その結果、たとえば、「色覚は犬では概して痕跡的であり、多くの犬では全く欠けている」一方で、「光の強さの差について」は、「人間の視覚よりはるかに勝っている」ことが明らかになった。[4]

「音の高さの分化については」、「いろいろな吹奏楽器を用いて試験したところ犬の聴覚器が完全に正確に捕えた限界の音は 8 分の 1 音」であり、高い周波数については「人間にはもはや聞こえない高い音で犬は興奮することがわかった。(略)われわれにとっては存在しない音にたいし犬がはっきりとまた正確に反応するのはみていて興味のあることだった」と記録されている。「メトロノームの異なった頻度にたいする分化の形成は大変容易で」、分化の「限界は非常に精密で人間のとても及ばないものであった。とくに 1 分間 100 回と 96 回とをずいぶん時間をおいても正確に区別した。」と、犬の感知能力について詳しく報告されている。

4.2. 負の相互誘導実験

パブロフは、犬が条件刺激を分化できる能力を使った比較実験を行なっている。その中で、「継時複合刺激」は複数の刺激を連続して与える与え方をわずかに変えるものである。たとえば「プープ」和「プープ」といった同じ笛の音をリズムを変えて与えた場合や、「ドレミファ」と「ファミレド」の刺激に対してそれぞれ分化が行なわれることが確かめられている。

犬の感覚や感情や欲望を認めないパブロフにとって、「継時複合刺激」による分化の形成は、大脳皮質の同じ部位を刺激しているのにどうして分化が可能であるのか説明が困難であった。犬に記憶や判断能力が備わっていると考えるならば、時系列上のひとつながりの別の刺激として受け止めたと考えられる。だがパブロフの既成概念はそのような読み取りを許さなかった。

パブロフが苦しい説明すらできなかったのは「相互誘導」実験であり、とくに「負の相互誘導」実験であった。これは無条件刺激を伴わない条件刺激として分化した刺激を、無条件刺激を伴う条件刺激に変更(「分化抑制の破壊」)する実験である。

「無条件刺激を伴う分化刺激をつぎつぎと続けて与える場合、抑制過程の破壊は一回目かまたは一般的に数回後にはじまったが、この組合せ刺激を正の条件刺激と規則的にくりかえした場合、破壊は非常に時間的に遅れ、多くの回数、ときには数十回もくりかえしたのちはじまった」とパブロフは報告している。

この実験は、いったん2つの条件刺激を用いて「餌」、「非餌」という分化を行なった上で、「非餌」という刺激の後で餌を与えて、「非餌」という刺激に対して涎が出るように変わるかという実験である。

「非餌」という刺激を単独で与えながら、その後で餌を出すと、すぐに「非餌」という刺激に対して涎が出るようになった。(これは「餌」という刺激の後で餌を与えないときも同様にすぐに涎が出なくなり、パブロフはそれを「条件反射の消去」と呼んでいる。)

しかしながら、「餌」の刺激の後で餌を与え、その後に「非餌」という刺激を与えて餌を与えると、このサイクルを何十回繰り返しても涎が出るようにならないというのである。パブロフはこの現象をどうしても説明できなかった。

4.3. NOT にもとづいた概念体系の構築

パブロフは条件反射の分化実験において、犬の視覚の色彩や明度、聴覚の周波数や頻度の分解能力に着目していた。はじめのうちは筆者もそのように受け取って読んでいた。

しかし、犬が異なる条件刺激に対して効果の有無で反応したのは、犬が一方の刺激を無条件反射を意味する記号として、もう一方をそうではない記号として受け止めたということである。すなわち、受け取った刺激は、A と非 A として分類されたことになる。これは犬がブール演算の NOT によって、世界を記号化して切り分けたということではないか。そして、そのように世界を分化した体系が出来上がったために、負の相互誘導において A と非 A の刺激を交互に受けたとき、非 A の刺激の後で何度無条件刺激を受けても反応が非 A

であり続けたのではないだろうか。

代数の研究成果を確かめることはできなかったのであくまで推論であるが、NOT という関数を手に入れると、世界は二元分化され樹状図に体系化される。

$$\begin{aligned} A &= B + \text{Not}B \\ &= B + (C + \text{Not}C) \\ &= B + C + (D + \text{Not}D) \dots \end{aligned}$$

こうして概念体系は、動物の知能の働きとして、生命の論理にしたがって構築されるのではないだろうか。

5. 文明を自然に近づける天命反転

もしかすると我々の文明全体は、石器時代の狩猟採集民から受けついだ本能や感覚と根本的に相容れないものであり、人類としての正しい発展から逸脱しているのかもしれない。もしそうであるなら、なぜそのような発展が起こりえたのか。

(H. Martin "The Sheltering Desert - Robinson Crusoes in the Namib")

5.1. ブッシュマンの魂

宗教教育の結果、パブロフが犬の感覚や欲望を否定したことを、我々は笑えるだろうか。我々自身もっている概念体系は本当に正しいのか。もし正しいとしたら、なぜ地球環境問題は起きたのか。正しくないとしたら、どこがどう間違っているのか。

パソコンが自分にインストールされている OS を疑うのは大変なように、無意識に自分に植え付けられた概念体系は、意識化するだけでも難しい。それが間違っているかどうかはどうすれば知りえるのだろうか。

"The Sheltering Desert"は第二次世界大戦中に、ナチス政権に徴用されることを逃れるために2人の若いドイツ人地質学者がナミブ砂漠で二年半にわたってロビンソン・クルーソーのように暮らした記録である。

2人は、ナチスが政権をとってファシズムへ戦争へと突き進むドイツを逃れて、ドイツ領南西アフリカ(現在のナミビア)で仕事をしていた。いよいよ第二次世界大戦が始まると、ドイツ軍がマジノ線を破って破竹の勢いで進軍し、南西アフリカにも戦争のプロパガンダと熱狂がおしよせてきた。彼らは砂漠に隠れることを決意する。食料や銃弾やその他のものを調達し、1匹の犬を連れて、2人は1台の小型トラックに乗って砂漠に隠れ家を探す。そして2年半にわたる砂漠でのサバイバル生活が始まる。

洞窟に居を構えた彼らは、どうやって水と食料を確保するかで頭がいっぱいになる。ピストルやライフルという近代兵器を持っているだけでは野生動物を仕留めることはできない。彼らは徐々に狩猟民の心や勘を取り戻す。そして星空のもとで毎晩語りあうなかで、我々の文明が、進歩というよりはむしろ誤りであった

という思いが浮かんでくるのだった。

「おそらく感覚は生命体に対して、状況が良好かそうでないかを伝える判断だ。すると判断を形成する能力は、生命にとっての基本的な属性ということになる」「本当に基本的なのだろうか」

「そうだよ。生命現象のない無生物と比較して、生物の特徴は活動するところにある。単細胞生物であつても、飛んでいくことや外部に対して閉ざすことで、好ましくない環境を避けることができる。しかしそうなるためには、感覚、あるいは判断能力が必要となる。そうでないと、好ましいか好ましくないか知りえない」「そのとおりだ。しかしもしそれぞれの感覚が判断を含んでいるとしたら、人間に判断能力があるということのも、実はあらゆる生命体がもっている原初的本能が発展しただけにすぎないのではないか。

すると、単細胞生物が人類の到達した最高の知的能力に至る可能性を持っていないといえるかね」

「結局、何千世代にもわたって我々の先祖は今我々がこうして（砂漠で狩猟生活）暮らしているように生きてきた。そして過去の2~300世代では、我々の根幹の本能にたいした変化はもたらさなかった。要するに我々の魂は石器時代人のままなのだ」

「君は、現代人は自分たち自身の文明と調和していないというんだね。私もそう思う。」

— The Sheltering Desert

5.2. 自然と調和した心を作る「天命反転」

自分の中のブッシュマンの魂を見つけるために砂漠で自活するのは大変である。もう少し身近で手軽にできないかと考えたとき、荒川修作が天命反転(Reversible Destiny)とは新しい文明を築くことであるといっていたことを思い出した。直線や平面で自然を切りとるのではなく、自然の形に合わせて文明空間、すなわち人間が居住し活動する空間をつくりあげた。

三鷹や養老の天命反転空間には、しっかりとした使用法が用意されている。既成概念を捨てて、新しく記憶と知識を生み出す気持ちをもって、使用法にしたがった生活をすれば人間は石器時代の自然と融合した魂を取り戻せる。最澄が求めた修験道の世界は天台宗で千日回峰行として今日に伝わる。道元が打ち立てた只管打坐の坐禅行は今も多くの人々を悟りへと導く。アラカワの天命反転は千日回峰や只管打坐に匹敵する、人類意識を自然へと回帰させる手法である。

何度か家をでたり入ったりし、その都度違った入口を通ること。

中に入ってバランスを失うような気がしたら、自分

の名前を叫んでみることに。他の人の名前でもよい。

自分の家とのはっきりした類似を見つけるようにすること。もしできなければ、この家が自分の双子だと思って歩くこと。

今この家に住んでいるつもりで、または隣に住んでいるようなつもりで動き回ること。

思わぬことが起こったら、そこで立ち止まり、20秒ほどかけて(もっと考え尽くすために)よりよい姿勢をとること。

どんな角度から眺める時も、複数の地平線を使って見るようにすること。

— 養老天命反転地 極限で似るものの家 使用法

我々の意識は、物質文明の中でより多くの消費や所有を追い求めるように初期化されるが、もしかしたらそれは間違っているのではないか。我々は直線や平面で切りとられた空間に生活するが、それは間違っているのかもしれない。

荒川修作は、50年間アメリカで暮らし続け、日本から失われてしまった里山の風景と地形を、養老の公園と三鷹の住宅として復元し、日本人が自然と調和した心を取り戻す仕組みを作り上げたといえるだろう。

自然の多様性と調和したつつまじやかな空間に住み、そこに安住する。物質の所有を願わず、不必要に自然を壊さない。人間が他の動物より偉いといった考えは持たない。忘れていた動物時代の記憶を取り戻すことが、後戻り不能な地球環境問題によって人類のみならずすべての生物にとって生きづらくなった21世紀を生きていくうえで大切である。

謝 辞

本研究のために三鷹天命反転住宅への短期居住を許していただいた倉富和子さん、株式会社ABRFに感謝します。

文 献

- [1] 得丸公明 クラシーズ河口洞窟 人類が裸になった場所を探して、SOTOKOTO 2007.9
- [2] 得丸公明 洞窟進化仮説 人類が裸になり、言葉を使い始めた洞窟を探して、測量 2007.12
- [3] 得丸公明 ヒトの音声は phonit でデジタル変調されている(復調はアナログ方式である) -デジタル言語学(その1) 情処学会研究会 SLP-81-11
- [4] パブロフ I.P. 1927 大脳半球の働きについて 条件反射学, 川村浩訳, 岩波文庫 1975
- [5] 得丸公明:知識の表現型と遺伝子型(デジタル言語学)「条件反射」と「分節言語」を考える 信学技報 TL2010-10
- [6] 原民喜 夏の花, 1947 青空文庫
- [7] パブロフ I.P. 高次神経活動の客観的研究, 岡田靖雄・横山恒子訳, 1979 岩崎学術出版社 p19
- [8] F.クリック 熱き探求の日々1989 TBS ブリタニカ